

門跡尼寺法華寺

日本における仏教の普及において重要な役割を果たした光明皇后（701～760年）が、有力な貴族であった父親の藤原不比等（659～720年）の大邸宅があった場所に、門跡法華寺を建立した。その後、光明皇后の夫の聖武天皇（701～756年）が東大寺を総国分寺と定めると、光明皇后は法華寺を総国分尼寺と定めた。13世紀から16世紀にかけて、皇族や貴族の娘たちが尼僧として法華寺に入った。

「法華寺」とは、ざっくりと「法の花の寺」と訳すことができる。光明皇后は尼寺の女性たちに生け花を実践するように勧め、法華寺御流の生け花の流派は今日まで続いている。非常に信心深い女性であった光明皇后は、女性を尼寺に入れることだけでなく、恵まれない人々を助けることも自らの務めであると考えていた。光明皇后は診療所を設立し、また孤児や障害者のための住居も整えた。皇后は、寺の境内につくった「からふろ」と呼ばれる浴室で、千人の病人の汚れを洗い落としたとされている。からふろは1766年に再建され、今も境内に立っている。

法華寺のその他の見どころとしては、十一面観音像や維摩居士像（いずれも国宝）、法華寺庭園（カキツバタの花で有名な国指定史跡）、また17世紀に建てられた本堂、南大門、鐘楼堂などがある。